

第七宇宙、異常あり

1

宇宙は生まれた瞬間は混沌としている。そして長い時間をかけて夜明けを迎える。しかし、中には夜明けを迎えず混沌としたままの宇宙もある。この宇宙も例外ではない。

2

他次元宇宙に生命体があった。その宇宙は非常に静かで、安定して、平和な宇宙だった。そしてそこにいる生命体は我々のような人間とは少し違う存在だ。彼らは肉体を持たない意識のみの生命体だ。姿はなくとも、その存在を感じ取れるほどに彼らは強大だ。彼らは全宇宙の生命体の中で最も高次的な存在であり、基本的になんでも出来て、なんでも知っている。我々はそのような存在のことを「神」と呼ぶ。そしてそんな最も神に近い存在である彼らの使命はこの無限に広がり存在する宇宙に「調和」をもたらすことである。

3

そして彼らは、ある宇宙を見つけた。彼らにとってその宇宙はどうも変だった。無秩序ながらも確かに宇宙としては生きていたものだったからだ。何が問題だったかと言えば、生命が生まれそうになればバランスを崩したかのように振り出しに戻る。彼らはこの無秩序をなんとか秩序あるものにしようとし、大量の力を割いた。銀河を丸ごと整理したり、超空洞に大量の星雲や銀河を作ったりもした。しかし叶わなかった。だから彼らは最後の手段として、その宇宙にあるものを送り込んだ。「エネルギー」である。彼らはその宇宙のことを「第七宇宙」と呼称した。

4

彼らは送り込んだエネルギーが第七宇宙に浸透していく様子を見守っていた。そして長い年月が経ったある日のこと。ある星で最初の知的生命体が誕生した。それはただボーッと目の中の虚無を眺めていた。そして彼らが送り込んだエネルギーがそれに入り込んだ。そしてそれは自分の使命に気づいた。これから生きて、学び得た知識や情報を子孫に継承していかなければならないということに。長い年月をかけて自分と同じ種族を増やし、知識や情報を広げていく必要があると。それこそが彼らが「エネルギー」をこの宇宙に送り込んだ理由だ。ただの質量変化では意味がない。そこに「エネルギー」があり自律的に、能動的に動いて初めて調和が取れる。

第七宇宙、異常あり

5

そしてそれは歩きを覚えたばかりの幼児のようなおぼつかない足取りでゆっくりと歩き出した。新しい生命が自分の意思で動き出したのだ。それが歩き出した瞬間、彼らは自分たちの判断が正しくそれとその子孫らは、きっと宇宙に調和をもたらしてくれるだろうと信じていた。

6

しかし彼らは正しくなかった。それとその子孫らは後に「人間」と呼ばれる存在になるからだ。

作成年月日 2024/10/07